

**Q1 MSC の評価手法としての特徴は何ですか？**

A1 大きく分けて、以下の三つがあります。

- ① 誰でも参加できる手法であること：「物語を話す」ことは誰にでもできます。そのため、途上国の住民のような、教育を十分に受けていない人でも、容易に評価に参加することができます。
- ② 質的（定性的）評価であること：人間の意識や行動変容などは数量化することができません。MSC は「物語（エピソード）」を用いることで、数量化できない変化を生き生きと把握・描写できます。また「変化」の背景やプロセスを分析することで、活動を「改善」する教訓を学ぶ点に優れています。
- ③ 現場のエンパワーメントに資すること：外部の評価専門家でなく、受益者の住民やスタッフが積極的に評価に参加できます。現場の視点や感覚が評価結果に反映されるとともに、参加を通じて人々のモチベーションが向上して、彼らのエンパワーメントに寄与します。

**Q2 MSC の基本的な進め方を教えてください。**

A2 評価やモニタリングの際に、以下の三つのステップをスタッフ中心に行います。

- ① データ収集のステップ：現場で受益者住民にインタビュー等の方法で、ある一定期間に起こった「最も重大（＝意味のある）な変化」の物語（エピソード）について、聞き取り調査を行います。複数の物語を集めます。なぜ、それを重大（＝意味のある）と思ったのか、も聞き取ります。
- ② データ分析のステップ：集まったいくつかの「変化の物語」を、スタッフのグループ討論で相互比較をして、「最も重大（＝意味のある）な変化の物語」を一つ選びます。選んだ理由も書き留めます。このプロセスを通じて、スタッフが質的な評価に参加する機能があります。
- ③ フィードバックのステップ：決定した「最も重大な変化の物語」とその理由を、①の話し手である受益者住民に報告して、結果を共有します。

→ この三つのステップを行う中で、質的な変化の把握や、変化の背景などプロジェクトを改善していく教訓が導き出され、スタッフや受益者間で共有され、それが改善へのモチベーションになります。

**Q3 MSC は誰が考案して、誰が使っていますか？**

A3 1990 年代にバングラデシュの NGO 活動で、イギリス人リック・デイビス氏が考案しました。これまでオックスファムやケア・インターナショナル、アクション・エイドなど欧米の国際 NGO を中心に世界中の国際協力の評価に使われています。オーストラリアなど先進国で使われた例もあります。

**Q4 日本では MSC は使われていますか？ 国際協力だけですか？**

A4：参加型評価センターが普及しています。これまで（特活）日本 NPO センター（震災復興事業評価：2016）、トヨタ財団（地方創生事業評価：2016）、環境省（ESD 評価 2016-7）、岡山県立和気閑谷高校（生徒会評価：2016）、所沢市社会福祉協議会（福祉事業評価 2018-）など主に国内の活動で採用されています。また田中が講師を務めた JICA ミャンマー主催日系 NGO 対象研修（2017）では、（特活）難民を助

ける会ヤンゴン事務所のフィールドを使って、MSC 評価が実施されました。

**Q5** MSC は国際協力プロジェクト評価に多く使われますが、JICA の PCM 手法と比べ何が違うのですか？

A5 JICA の PCM は、PDM (ログフレーム) というプロジェクトの計画表をもとに「指標」を設定し、それを定期的に計測することで目標達成度を客観的に把握するものです。そのためドナー (資金提供者) への説明責任に適しています。その一方で PCM は、「定性的 (質的) な変化の把握は苦手である」「達成度がわかってその理由はわからない (=改善に結びつかない)」「普通の人々には理解が難しい」などの欠点が国際 NGO から指摘されています。一方、MSC は難しい指標を用いません。また「定性的変化を把握」「学習と改善が得意」「誰でも参加できる」など、PCM の弱点を補完できる長所を持っています。

**Q6** MSC が考案され欧米 NGO で広まった理由は何ですか？

A6 欧米の国際 NGO は、1980 年代から国や国際機関から財政支援を受けるようになりました。同時に、説明責任のために JICA の PCM に似た評価手法の使用を義務付けられました。ところが、PCM 手法には A5 で説明したような欠点があります。国際 NGO から、「もっと現場に焦点を当てた評価を」「ドナーへの説明責任だけでなく学習・改善のための評価を」「自分たちにふさわしい新しい評価手法を」という声が上がりました。そのような背景の中で、PCM にはない長所を持つ MSC が注目を集めて積極的に活用されるようになりました。

**Q7** MSC はどのようなプロジェクトに向いていますか？ どんな評価目的に適していますか？

A7 NGO/NPO が行なっているような小規模な教育・福祉などの社会開発事業の評価に適しています。このような事業は、人間を対象としているため、計画通りに事業が進まないことが多いです。そのため、定期的に評価を行い、活動を修正していくことが求められています。その際に、現場の実情が生き生きとわかる MSC が有効なのです。反対に、インフラ整備や大きな建造物を立てるような経済開発事業には、MSC より、PCM のような手法が向いていると言われていました。

評価目的においては、「学習・改善」目的の評価に適しています。

**Q8** MSC には欠点や課題がないのでしょうか？

A8 MSC は優れた評価手法ですが、人間が作ったものですので、完璧ではありません。以下の課題があるとされています。

- ① 物語の聞き手に一定の力量が必要：物語を話す住民にとっては簡単なのですが、聞き取るスタッフ側に、一定のインタビュー技術などが必要です。これは研修を実施することで克服可能です。
- ② 数量的な説明責任の達成は苦手：MSC は定性的 (質的) な手法なので、PCM のように目標達成度を定量的に確認して報告することはできません。
- ③ 予想された変化を確実に捉えるとは限らない：MSC は住民が自由に話すため、想定外の変化がわかることもあります。一方、予想された変化を必ず把握するとは限りません。

→ 上記の理由から考案者デイブスは、MSC と PCM 的な手法を併用することを勧めています。

以上